

イタリアに学ぶシュート感覚

【ベースボールマガジン社】発行月刊誌サッカークリニック
2003年4月号掲載記事
天野泰男著



イタリアに学ぶシュート感覚

日本人はなぜシュートが入らないのか
はじめに

「TIRO(ティーロ)！」イタリアのグラウンドでこの叫びとも聞き取れる響きを何度耳にすることであろうか？「引っ張ること」を語源とした「シュート」を表すこの言葉は、監督をはじめ多くの観衆から何度も聞こえてくる。シュートはサッカーの究極の目的であり、最も美しい場面である。

¹日本サッカー協会の 2002 年ワールドカップ試合分析によると日本のシュート決定率は前回フランス大会より向上した。しかしながら、それでもイタリアをはじめヨーロッパや南米の選手はシュートがうまいと言われる。監督の経験がある人なら「あの時シュートさえ入っていたら試合に勝っていたのに」と悔しい思いをしたことがあるだろう。一見運のなさで片付けられそうなプレーでも実は明確な原因があるものだ。なぜ日本人はシュートが下手なのか？イタリア人のシュートに対する考え方から、シュートのうまい選手を育成する方法を述べていきたい。

攻撃の仕上げがシュート

サッカーにおいて試合に勝つこと、そのために得点する事が目的であるのは明確である。得点はシュートを打たないと入らない。攻撃とは「得点する」という目的の為に計画性を持ってプレーする事である。一方守備は相手チームの計画性を壊してボールを奪うもので、やや荒っぽい言い方になるが攻撃は「作り上げるもの」、守備は「壊すもの」と言える。当然作り上げるより、壊すことの方が簡単で何とか守る事は出来ても得点する事は難しい。攻撃の過程は困難かつデリケートで緻密な計画が求められる。ドリブルやパスは全てフィニッシュのために行われるべきである。時には強引さや無謀と言うプレーも必要だがそのほとんどは「勝手なプレー」や「わがまま」といった周りから非難されるプレーとなる。しかしまさしくシュートだけはこの強引や無謀が「ファンタジア」という美しい言葉に置き換わって賞賛される局面ではないだろうか？

イタリア人のシュート価値観

イタリアに試合をしに行くと観客から「今の(場面)はシュートじゃないか！なぜ打たないんだ」と言われる。イタリア人コーチも「サッカーの目的は得点することなのに、日本人は抜くことで満足している」と指摘される。イタリア人は子供の頃からみんなシュートがうまいわけではない。強引なシュートで大ぶりし枠を大きくはずすこともしょっちゅうだ。しかしシュートを打つタイミングは早く、何が何でもシュートまで持ち込むという精神力はものすごいものがある。日本人に比べてイタリア人はシュートに対する価値観が高い。

¹ 1998 年フランス大会では日本の 1 試合平均シュート数は 18.3 本で、参加チームの中で第 5 位だった。また、シュート決定率は 1.8% で第 32 位と低かった。2002 年大会は 1 試合平均シュート数は 9.3 本と減少したが、シュート決定率は参加チームで第 8 位の 13.5% と非常に向上した。(日本サッカー協会 2002 ワールドカップテクニカルレポートによる)

セリエAの観衆から子供の試合を応援する家族に至るまでシュートに対して惜しめない拍手を送る。一方日本では《これは全くの私見だが》シュートまでのプレー、すなわち守備者をトリッキーで抜くプレーとか美しいパスワークに目が行きがちでシュートそのものよりもその過程に価値観を求めているような気がする。それに対してイタリアでは過程に対する評価よりも、シュートを打ったかどうかの方が大切なのである。だからイタリアの選手はいつもシュートを狙っているし、シュートこそが最高のプレーとしているのだ。セリエAの得点場面で見られるあのスタジアムの異常なまでの興奮度はそれを証明している。日本ではシュートをはずした選手に対して「ナイスシュート」と言う事を厳しく禁じたコーチもいるが、シュートそのものは最大限評価されるべきであるし、はずしてしまった事はそれほど非難する事ではない。シュートがうまくなるにはシュートをたくさん打つことだ。

シュートチャンスを逃すな

「フェイントやパスワークに目が行きシュートに対して価値観が低い」ということは²ボール回し(鳥かご)練習が大好きな日本人を見れば決してこれが極論とは言えないだろう。この練習にはシュート場面が存在しない。また、一対一の練習をするとこれはより顕著に証明される。コーチは何も言わずに、できれば大きなゴールでキーパーも置かず一対一をさせてみる。少年から大人に至るまでまず抜く事を考えるのではないだろうか？キーパーがいないのだからシュートコースやシュートチャンスはたくさんあると思う。例え守備者を抜かなくてもシュートはできるはずである。あるいは、キーパーのいない4対4のミニゲームをさせてみよう。これもたぶん一対一の時と同じようにシュートの場面が少ない光景になるだろう。こういうところからイタリアとは違う。イタリアではまずシュートを狙う。守備者の寄せが遅かったらシュート、リスタートもすぐシュート、一人かわせばすぐシュート。シュートが打てないからパスをして守備者を抜いていく。よりゴールに近づき、よりフリーになり、より完璧な形でシュートに持っていかうとする気持ちもわからないでもないが、そのプレーでシュートが打てなかったとしたらそれは悪いプレーだと指摘しなければならない。シュートを打ってははずす事よりも、シュートを打たないプレーの方が悪いという価値観を植え付けなければならない。シュートをはずして「こら！」と怒り、シュートチャンスを逃して持ちすぎたプレーを「おいしい！」ではいけない。シュートチャンスを逃している場面を指摘し修正しなければならない。

厳しい守備

どの年代においてもイタリアでは守備は厳しい。ラグビーのような体を使った鋭い寄せ、

² 先般行われた公認コーチを対象にしたリフレッシュ講習会で講師の大橋浩司氏(JFA ナショナルコーチングスタッフ/JFA インストラクター)は、「Jリーグの選手に対して行われた準指導員の講習会で「準備された様々な用具を使って自由にサッカーをしましょう」という課題に対してほぼ全員がボール回しの練習を行ったという事例を紹介した。ミニゲームをやらずにボール回しのほうが面白いと考えている事に対して危惧を覚えたという。

深いタックル、チャレンジとカバーのコンビネーション。15歳ぐらいまでの公式戦では副審がない(実際は副審と思われる「旗を持った人」がいるのだが、驚く事に実際何もしない)こともあって微妙な判定のオフサイドを流される事も多いため、守備ラインは深い。イタリアイコールオフサイドトラップを多用したプレッシングサッカーと思われがちであるが、ほとんどのチームはリベロを置きしっかり守るスタイルが多い。当然守備に関してはきちっと指導されておりボーとして立っている選手など一人もいない。練習においても日本だと「チームメイトや先輩にハードタックルしたら何を言われるかわからない」などと甘い考えでプレーしている事が多いがイタリアでは試合と全く同じ集中力と厳しさを持ってやっている。こういう厳しい環境でやる事がシュート力アップにつながっているのだ。日本では「攻撃者はシュートを打たない、守備者はいい加減」で通用する。そうなればストライカーもディフェンダーも育たない。そんな環境で練習しているから「本気」になった守備者と対戦する試合ではシュートが打てないし、打ってもミスをしてしまう。イタリアでは、攻撃者はまずゴールを狙う。ゴールを狙われない為に守備者は厳しくアプローチしなければならない。

シュートの場面は試合の中で一番激しい局面である。守備者は全力を出してゴールを守ろうとするし、それを破る攻撃者にとって多大なる労力を必要とする。そんな状況にもかかわらずキーパー一人だけが守っているゴールにいくらシュート練習をしても本番で入るはずが無い。サッカーの練習は試合の一場面を取り出した物でないといけないうし、試合であまり起こりえない状況をいくら練習しても試合で生かせることはないだろう。

コーチは守備の個人戦術はもちろんあらゆることを8歳ぐらいから、そして12歳ぐらいからは厳しいマークを教えないといけないう。これがストライカーを育てる環境である。シュート練習に工夫を

キーパーを置いただけのポストシュートやセンタリングシュートの練習がシュートを学ぶある段階途中の練習としては必要としても、これだけではいかに試合に役立たない無意味なものかわかっていただけたかと思う。

シュートを打とうとしている選手には二つのプレッシャーがある。一つは物理的に妨害してくる「ディフェンダー」。もう一つは精神的に追い詰められる「時間」。この二つのプレッシャーをはねのけてこそゴールが生まれる。守備者はつけずセンタースポットからドリブルしてキーパーのいるゴールに向かってシュートをする練習をやらせてみる。得点する事はそれほど難しいことではないだろう。これに「10秒以内でシュートをする」という条件をつけるとより難しい局面に変わる。JFAによるワールドカップの分析でボールを奪ってから得点に至った攻撃時間を見ると10秒以内が53%を占めている。また、得点までのパスの本数は3本以下が61%を占める。つまり時間は守備者に味方する。シュート練習にはこの時間のプレッシャーを与えなければならない。これまでの日本のシュート練習はこのどちらのプレッシャーも無い優しいものばかりではなかったか? ヴィッセル神戸の監督を務めたバクスター氏に質問した事がある。「日本人はどうしてシュートが下手なんでしょ

うか？」その時の答えは「日本人のシュートはとても上手いよ。シュート練習を見てごらん日本人選手もストイコビッチと同じようにゴールしているじゃないか！」

シュートの効能

試合中のシュートにはどのような効果がるのだろうか？最初に述べたようにサッカーの試合において得点は究極の目標である。この目標を達成する為にシュートが存在する。入れば目的が達成されるが、入らなかった場合でもシュートは相手チームに対して大きな影響を与える。

まず、シュートを打つあるいは狙っているチームに対して守備者はどうしてもアプローチしなければならない。これは、守備者を前方に引き出させる効果がある。引き出せば守備者の背後にスペースが出来やすくなり相手ゴールに近いスペースを使いやすくなる。

次に、ゴールキーパーを下げさせる事ができる。ラインディフェンスで守るチームはキーパーがリベロのようにゴールから離れてラインの後ろでカバーをしている。ゴールが空きの状態にしてまでもカバーを優先させているからだ。これは、攻撃者にとって厄介な存在となる。せっかくスルーパスを通してキーパーが飛び出してきてクリアされてしまう。このキーパーにとってロングシュートやループシュートを狙ってこない相手にはこの上やりやすい。ところが、少しフリーにすればロングシュートを狙ってくるチームには困るだろう。ゴールをいつも狙われては、簡単にゴールを空けるわけには行かない。キーパーをゴールに張り付けさせることにより、守備ラインとキーパーとの間にスペースを作る事ができ連携を悪くする事ができる。

また、セットプレーを期待できるというメリットがある。シュートは落ち着いてゴールを狙った計画的なもの（シュートの際ボール　ゴール　ボールと視点を変えコースを狙ってシュートする）もあるが、無計画とまでは言わないが少々強引で得点は期待できないがいわば力任せの思い切ったものもある。この手のシュートは守備者も予想が付きにくくハンドを誘ったり、コーナーキックになったりとセットプレーに結びつく場合がある。また、こぼれ球が予想もつかないところに転がり思わぬチャンスがめぐってきたり、守備者にあたってコースが変わり得点になったりという幸運もある。冒頭で述べた攻撃においてシュートにだけ許された無謀さが勝利に結びつく事があるものだ。フリーになってから完璧な形でシュートを打とうという考えでは、この偶発的ラッキーは生まれない。